圏央道は、26 年度中に県内全面開通を予定している。それを県産農水産物の輸出拡大につなげるためには、物流基盤の活用に加えて、生産・流通・販売が一体となった取り組みの強化が重要である。

11 月 7 日、首都圏中央連絡自動車道（以下、「圏央道」）の大栄ＪＣＴ～多古ＩＣ間（約 9.1km）が開通した。今回の開通により、圏央道の県内未開通区間は多古ＩＣ～松尾横芝ＩＣ間（約 9.4km）のみとなるが、同区間も 26 年度中の開通を予定している。

圏央道は、都心から約 40～60km 圏を環状に結ぶ、総延長約 300km の高規格道路である。東名高速や中央道、関越道、東北道、常磐道、東関東道などの主要幹線道路と接続し、首都圏の広域的な道路ネットワークを形成している。県内全面開通により、茨城県境から成田空港周辺、木更津エリアまでがひとつながりとなり、県内の主要拠点へのアクセスが向上する。また、交通の分散による渋滞緩和や物流の効率化、沿線エリアでの企業立地・産業集積の促進、代替輸送ルートの確保による災害対応力の強化など、さまざまな効果が期待される。

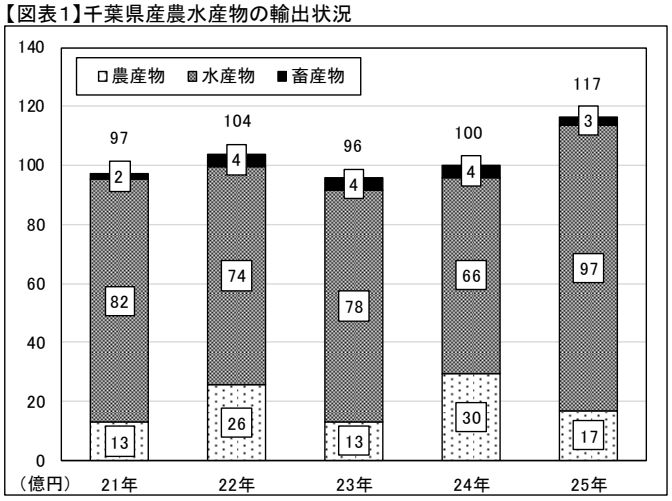
こうした効果の中でも、成田空港を活用した県産農水産物の輸出拡大への波及効果に対する期待感は強い。

国内人口の減少による市場縮小が見込まれるなか、農林水産業の持続的な成長には海外需要の取り込みが重要となる。千葉県の農水産物の輸出額は、25 年に約 117 億円となり、年ごとに増減はあるものの、緩やかな増加傾向にある（図表１）。県は 26 年６月に策定した「千葉県農林水産業振興計画」において、成田空港や成田市場を活用した輸出拡大を柱の一つに掲げている。具体的には、いちごやメロン、キンメダイなどを重点品目に位置付け、29 年までの輸出額目標を設定している（図表２）。また、輸出向け産地の育成、海外ニーズ調査、商談会の開催、輸出事業者とのマッチングなど、生産・流通・販売面での支援も進めている。

圏央道の整備進展により、県内産地から成田空港に隣接する成田市場への輸送時間の短縮が見込まれる。今回の開通により、例えばいちごやメロンが名産である旭市から同市場までの所要時間は約 61 分から約 55 分となる（図表３）。また、残る県内区間の開通後は、山海の幸に恵まれた山武市からも約 58 分から約 32 分へと短縮される見込みである。成田市場は、農水産物の加工から輸出手続きまでを場内で完結できる「ワンストップ輸出拠点」であり、アクセスの向上は、生鮮品の鮮度維持や物流効率の向上を通じて、県産農水産物の輸出拡大を後押しする。

圏央道の開通は、県内産地と成田市場、成田空港を結ぶ物流環境の改善につながるものである。ただし、実際に輸出が拡大するためには、交通インフラの整備だけでなく、生産体制の強化や輸出先の開拓、物流事業者や販売事業者との連携も欠かせない。今後は、県の輸出促進策も活用しながら、こうした取り組みを一体的に進めることで、圏央道の整備効果を県産農水産物の輸出拡大と県内農林水産業の持続的な成長へ結び付けていくことが期待される。（竹津）

【図表1】千葉県産農水産物の輸出状況



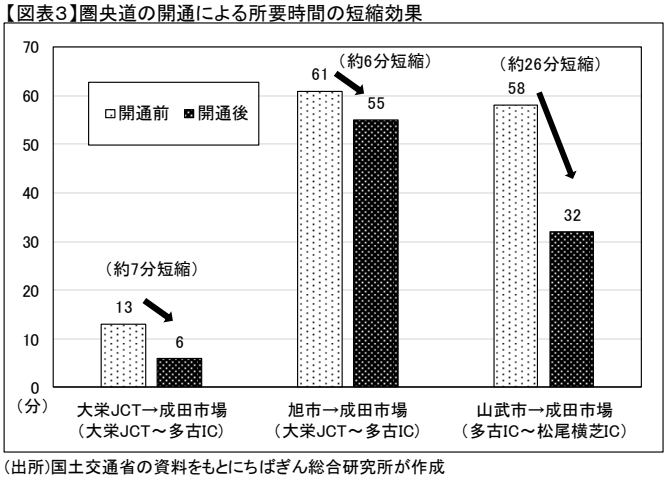
(出所)千葉県の資料をもとにちばぎん総合研究所が作成

【図表2】輸出重点品目(抜粋)

品目		輸出ターゲット国	輸出額(百万円) 24年(実績)	29年(目標)
農産物	いちご	台湾、マレーシア、タイ、北米、香港	13	30
	メロン		6	10
	切花		8	20
	さつまいも		99	170
	日本なし		12	30
	米		33	288
	植木		2,777	2,800
水産物	キンメダイ	台湾、マレーシア、タイ、北米、ベトナム、EU、中東	－	－
	サバ類など冷凍水産物		5,484	－
畜産物	鶏卵	台湾、マレーシア、タイ、北米、香港	246	330
	牛肉		－	－
	豚肉		－	－

（出所）「千葉県農林水産業振興計画」よりちばぎん総合研究所が作成

【図表3】圏央道の開通による所要時間の短縮効果



(出所)国土交通省の資料をもとにちばぎん総合研究所が作成